

岩伏し遺跡 第3次発掘調査ニュース

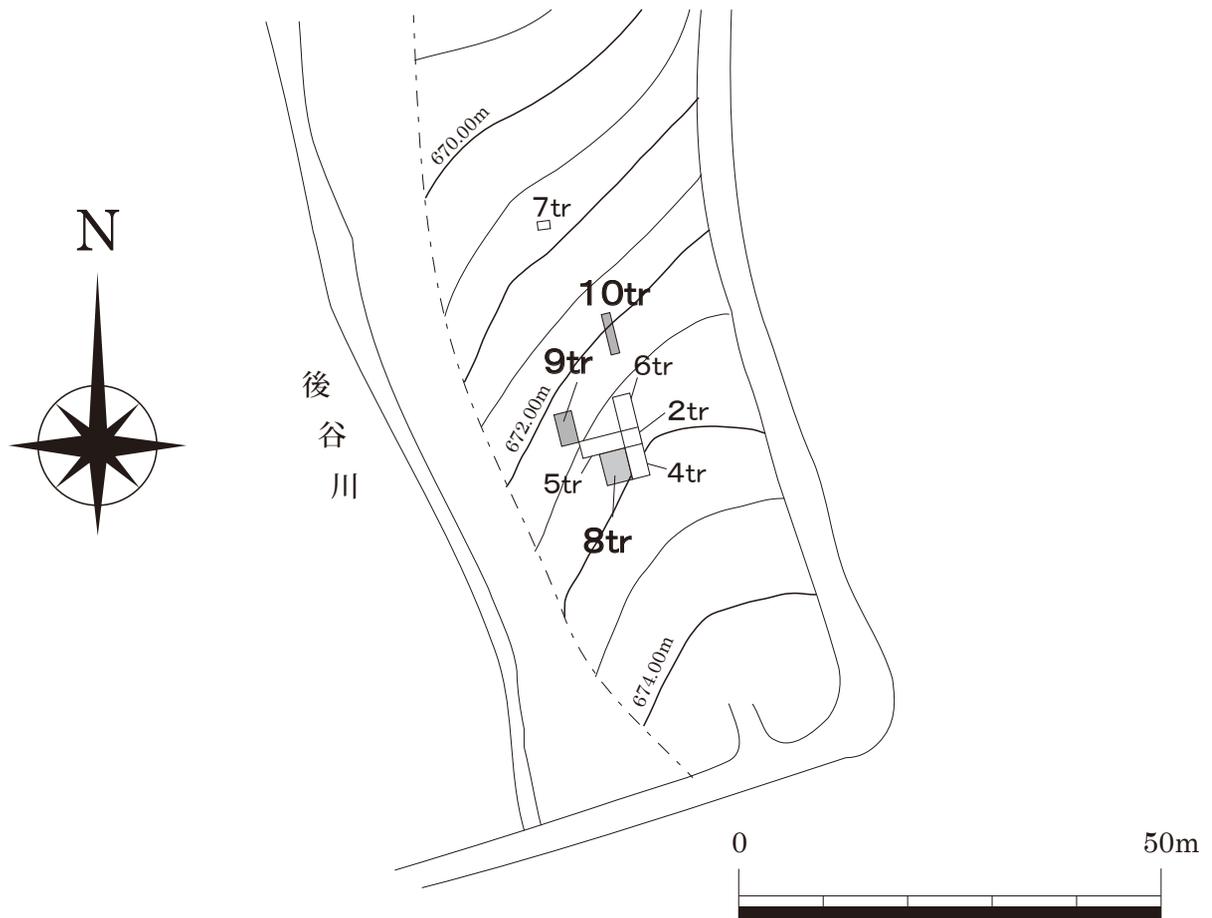
岡山大学考古学研究室 岩伏し遺跡第3次発掘調査団

2016年10月25日発行

はじめに

岡山大学考古学研究室では、大山山麓における縄文・弥生時代の生活の様子を明らかにすることを目的に、以前から発掘調査を実施してきました。

岩伏し遺跡（旧称中山香取遺跡）は、1976（昭和51）年度に鳥取県教育委員会による大山山麓遺跡群分布調査で発見され、縄文時代早期（約8000～9000年前）と後期（約3500年前）の土器片が報告されています。2014年度に岡山大学が実施した試掘調査では、縄文時代の土器片や黒曜石の石核（石器を作るための素材）が出土しました。また、2015年度に実施した発掘調査では、縄文時代の土器片約170点、黒曜石の剥片2点が出土しました。今年度も2015年度と同様、遺物の分布の広がりや遺構の有無を明らかにすることを目的に、2016年9月17日から23日に発掘調査を実施しました。



第8トレンチ

第8トレンチは、昨年の調査で確認された、焼けて赤褐色化した土の層の広がりを見て、その性格を明らかにすることを目的に調査を行いました。

連日の悪天候のため、縄文時代の遺物を含む黒ボク層を全面で掘り下げることが叶いませんでした。しかし、一部で赤褐色化した土層を検出し、その広がり方について一定の見解を得ることができました。

遺物は、表土から現代遺物1点、造成土である二次堆積層から土器片3点、赤褐色化した土層か燧石器ボク層から縄文時代後期頃の土器片3点が出土しています。表土から出土した現代遺物は牛用の注射器、赤褐色化した土層から出土した石器は、木の実などをすりつぶす際に用いられた石皿の可能性がります。また、二次堆積層から出土した土器片のうち1点は撚糸文(撚紐を土器の表面で転がしてつけた文様)が施されたものとみられ、縄文時代早期頃(約8000年前)のものと考えられます。



現代遺物



撚糸文土器



石器

第9 トレンチ

第9 トレンチは、昨年の調査地からの土層の広がりを確認することや、当時の地形を知ることが目的として調査を行いました。

黒ボク層を掘り下げることが出来ませんでしたが、一部深く掘り下げた場所で黒ボク層下のローム質土層まで検出し、各土層の土を試料として採取しました。土に含まれている花粉や火山灰に関する科学的な調査を行うことで、遺跡を利用していた当時の環境を再現する糸口を見出すことができます。



第10 トレンチ

第10 トレンチは、北側への遺跡の広がりを確認する目的で調査を行いました。

黒ボク層の掘り下げには至らなかったものの、土層の堆積状況を調べるために北東の一部を深く掘り下げました。すると、遺構の可能性のある黒ボク層の落ち込みを壁面で確認できました。この落ち込みの性格については、来年度以降の調査で明らかにしていきたいと思えます。

遺物は調査区南西隅の黒ボク層の上面付近から縄文時代後期頃の土器片が1点、南側の二次堆積層から近年製作されたような金属製品が1点出土しました。





おわりに

今回の発掘調査は、連日の悪天候により思うように作業の進まない厳しい現場ではありましたが、いくつかの成果が得られました。出土遺物は、縄文時代の土器片が約 10 点と石器が 2 点です。石皿の可能性のある石器 2 点は、現在その使われ方を明らかにするために分析を進めています。また、赤褐色化した土層の一部や、調査区北部、西部での土の堆積状況などを確認しました。

昨年度までの調査で、遺物の出土状況などから、岩伏し遺跡を残した人々の生活の様子が、徐々に明らかになってきています。今回の調査成果も、人々の生活の痕跡や周辺環境について考える手がかりとなります。来年度以降も、岩伏し遺跡での調査を進めることを通して、縄文・弥生時代の大山山麓における人々の活動の様相に迫りたいと思います。

最後になりましたが、調査にご協力くださった地域の方々に厚くお礼を申し上げます。